

## ティナの手記から

荒木英行

部屋の整理をしていたら、引き出しの奥から大判の茶封筒が出てきた。青いマジックインクで「夫殺記」と略書きされている。これは一体何だろう、と思った。封筒を開けてみると手書きのドイツ語のコピーが入っていた。

思い出した。今を去ることもうかれこれ三十年も前になるかもしれない。さる書き物の取材のためにハンブルクを一人旅していた私は、資料館の休憩室でオットーという名の年配の男性と知り合った。そしてレストランで一緒にビールを飲んで食事したのち、その一人住まいのマンションに泊めてもらったことがあったのだ。私が物を書く人間であることを知ったオットーは、叔母にあたるという人物の手記を見せてくれた。婦人は名前を「ティナ」（仮名）と言った。癖のある筆記体で綴られた手書きは読み辛く、しかも当時の私の読解力からすればその場ですぐに読めるべくもなかった。ともあれオットーから話を聞いて内容を知った私は、その一女性の手記に大変興味を覚えた。

オットー宅には私の都合で一泊しかできなかったのだが、手記に関しては写しを取って送ってあげる、と言ってくれた。私が日本へ帰ってまもなくして、はたしてそのコピーは送られてきた。だが当時私は多忙にかまけ、また自分のモラトリアムな性格からして、別の大きな封筒に移し変えたまま置きっぱなしにしていたのだった。

幾星霜を経て今再び手にした手記を私は読んでみようという気になった。最初に考えたことは、手書きのドイツ語をパソコンで活字体書き直すことだった。だがどうせ書き直すのだったら、日本語で書いた方がいいのではないか。そこで私はまず筆者の癖を帯びた字をドイツ文字三十字、筆記体のまま書き出した。厳密に言うくと大文字と小文字で五十九文字ということになる（一文字、大文字の使われていない字があった）。それらの字の横に自分の活字体を書き添え、そうして出来あがった字形一覧表を横に置いて翻訳作業に取りかかった。

だがいかに年月を経ているとは言え、見知らぬ故人の手記を本人の了承も得ずに、他国で人目に供していいものだろうか。一抹の良心の呵責を感じた私は手記そのものの体裁はとらず、女性の一人称語りを三人称に替えてここに訳出することにした。したがって以下の記述は、私が自らの手で書き直した虚構に近いものだと思っただければ差し障りがないだろう。

\*

ティナは夫に毒を飲ませた。いや、飲ませてやったのだ。夫といっても別れた相手、しかも毒殺したのじゃない、死刑から救ってあげたのだ、と彼女は書いていた。

一九四一年のある夜、彼の愛人がティナのところへ来た。その時初めて彼が他の女と一緒にいる、と知った。もう六年も会っていなかったのだ。

夫の愛人は一応整った、きれいな目鼻立ちをしていた。しかし精気はなく、常に何物かに怯えるような眼差しだった。気は強そうに思えたのだが、卑屈なほどに臆病な素振りを窺わせた。おそらくあのマティアスと知り合ったときには、まだ精神の強さやそれなりの若さからくる美しさも持ち合わせてはいたのだろう。

エンマ、と夫の愛人は名乗った。コートを脱いだときにわ

かったのだが、エンマは妊娠していた。けれども事情があった結婚できないのだ、と彼女は語った。それはそうだろう、マティアスの妻は戸籍上この私なのだから——ティナはそう記していた。しかし戸籍上の妻に対して他の女性が「事情があつて」などと言うだろうか。おそらくそれは他の事情を指していたのだろうと思われる。

極寒の中を歩いてきた女の顔色はよくなかった。頬は並以上にかけていた。マティアスに捨てられたのだ、と瞬時にして思った。加虐性の悦びをティナは感じた。

エンマに熱いコーヒーをいれてやった。豆の残りは時節柄ことのほか心細く、夫の愛人ごときに振舞いたくはなかったのだが、自分が経済的に困っているとは思われなくなかった。

エンマという女はブラックのコーヒーに口をつけ、しばらくは黙って座っていた。なぜ来たのかを即座に話しはしなかった。ティナもわざと聞かなかった。マティアスと喧嘩をした、あの夜のことを思い出した。追い出されたティナは、酒場で明け方まで夜を過ごした。戦雲垂れ込める時代、酔客はきわめて少なかった。擬似クラシックともいうべき不快な賑やかな曲が、やけのように店内に溢れていた。今にして思えば、あの夜マティアスはこの女を家に呼び寄せ、一緒にベッドの中で過ごしたのかもしれない。そう思うと、なんとかこの女を困らせてやりたい、という心境になった。

ティナはラジオをつけた。あの時と同じような擬似クラ

シックともいうべき、やけっぱちな曲。これを知っていて自分はラジオをつけたのではないか、とその時ティナは錯覚した。

「マティアスが死にます」とエンマは押し殺したような声で言った。

ティナは平気だった。平気な自分をはつきり意識しても、なおかつ平気だった。彼は以前から呼吸器系統に軽い持病を持っていた。

「そう」ティナはゆっくり応対した。「病気がひどいの？」

「いいえ、病気じゃなくて、実はゲシユタポに逮捕されて……」そのあとの事情を割愛するかのような様子で黙したのち、「死刑の宣告を受けました」

左翼勢力の地下運動に駆け回っていた、あの精力的な夫の姿をティナは思い浮かべた。いつかはこうなるような予感がなかったわけでもない。

「いつまで生きていられるの？」文字通り他人事のようにティナは言葉を返した。

「来週——来週には絞首刑に……」

その時何と答えたのか、ティナの手記には記されてはいなかった。

「絞首刑……どうやったら助かるの？」

「だめ、無理です。もう救いようがない」

それでもなんとかなるように、ティナには思えた。

「どこにいるの？」

「シユバルツエンベルク。でもそこからシユタインフォルタールへ移されて、そこで処刑されると聞きました」

面接が許されない、とエンマは言った。マティアスと姻戚関係にないからだ。彼の妻であるティナなら許される。代わりに会ってほしい、というのが彼女の用件だった。

「でも、私は事実上妻ではない。だって、別れてもう、随分になるのだから」

「でも、奥さんなんだから」エンマは懇願するような語調で言った。「現実に夫婦生活を送っているかどうか、彼らにはわかるものでもないし、それはどうでもいいことなんです。ただ書類の上だけで……」

ティナは相手を見返した。エンマもティナの目をまっすぐに見た。自分の視線に、はつきりとした敵意をティナは意識した。エンマの姿にはその懇願するような態度とはうらはらに、コンクリートのような硬さと重々しさが感じられた。

「マティアスが——あの人が会いたいのあなたなんですよ？ この私ではなく」突っぱねたつもりでティナは言い放った。エンマは絶望的な表情で首を横に振っていた。その動きの意味するところは、ティナには凶りかねた。

「そんな問題じゃないんです。そんなことじゃなく、とにかく……誰かと話すことが大切っていうか……」

この世の最後に片付けておかなければならないようなこと

もあろうし、言い残したいこともあるだろう。とにかく彼をこの場に及んで一人にさせておくこともできない、とエンマは言葉を繋いだ。

「いいです」ティナは答えた。「いいです。早速行きます。でも、はたして面会できるかどうかはわからない。もちろんあなたも一緒に来るといい。ともかく知合いの弁護士に連絡しよう」

全く特殊な事情だったにもかかわらず、ティナはさほど込み入った心理状態にも陥らなかつた。自分がまるで優位に立った者のような心のゆとりすら抱いていられるのに、一抹の驚きをさえ感じた。

どのみち戦時の失業者だったティナは特にこれといってすることもなく、さしあたっての用事を済ませて二日後に早速出かけることにした。エンマも同行した。別れた夫の愛人は、まるで再起不能の敗北者のような印象を与えた。自分を見るときの彼女の目がなんといつても一番つらいことだった、とティナはその手記の中で強調していた。

たとえマティアスでなくても、誰であってもこのような立場に置かれた人に対してならば、ティナは同じことをしただろう。なんといつても人ひとりがこの世を去ろうとしているのだから。だがその相手が他ならぬマティアスであったという事実が彼女を不快にさせた。けれども、思えばマティアス以外の人物ならば、選りによって彼女にこのような負担を

かけることはなかつただろう。とても寒い、そしてとても暗い一月だった。町は灰色に沈み、どこかこの世の果てのような印象をかもし出していた。

空いていたホテルの部屋はダブルベッドで、ティナは夫の愛人と一緒に寝なければならなかつた。暖を取るための石炭も尽きていた。

初めの日に、意外と簡単に面会証が手に入った。「妻」という一語をティナは強く感じた。この紙切れ一枚が手に入らずにエンマは右往左往し、恋人の女房に泣きつかざるを得なかつたのだ。

刑務所を訪れたのは翌日の午後だった。ティナが所定の手続きで名前を告げると、看守が大声で以前の夫の名を呼んだ。

「マティーアス・ニアロンスキー！」

そんな人、いたっけね——なにやら懐かしむような感慨でティナはその名前の響きを聞いた、という。

二度、三度とその名を呼んで、それから看守はティナに言った。

「呼んで来るから、そこに掛けて待っているがいい」

もう一人、残っていた看守にティナは尋ねた。

「主人は死刑を宣告されたのですか」

「さあ、どうだかね」いま一人の看守は囚人の妻に目をくれることもなく言い捨てた。

「いつここを出るのですか？」

「じきに」と相手は応えた。「ことは早く運ぶ。おそらく一週間、さあ、どうだろう。わからんね」

男は窓から外を見るような姿勢をとった。

時計を見ると、一時を少し回っていた。奥から四人が一人連れられて来た。無精髭が長く伸びており、頭は丸刈りだった。頬がこけたというよりも落ち窪んだ、痩せた男だった。その囚人はティナを見るとたいそう狼狽した。マティアスだった。誰に会うのかおそらく知らされていなかったのだらう、混乱した男は瞬時に言葉を見つけないことができなかった。ティナも話せなかった。どうして予め言うべき言葉を考えておかなかったのか、この時になって自分の不用意に気がついた。こんにちは、久しぶり、お元気？ 気管支の具合は？ 痩せたわね、どの言葉もしっくりくるものではなかった。

ただ相手は笑みを見せた。

「エンマに頼まれて……」これがこの場合最も妥当な言い方だったらう。

「うん」

「エンマも来てるのだけど、入れてもらえない」

「エンマ——」

その一言は何か当然のことを口にしたようでもあり、また、ただの溜息のようにも聞こえた。

「彼女は元氣。あなたのことをとて心配している。当然

だけど」そう言ったあと、ティナは付け加えた。「赤ちゃんは八ヶ月目だった」

「そうか……僕からよろしく言っておくれ」マティアスは別れた妻をじつと見た。そして、「これからしばらく、そう、しばらくだね、しばらくあいつの側にいてやってほしい。頼むよ」ティナは頷いた。今の彼のためなら、何だっしてやりたく思った。

「俺がどうなるか、知ってるだろうね」そう言った時、側に立っていた看守が、

「刑のことは話してはならん！」と居丈高に言った。

奥で、と言ってもずいぶん遠い感じだったが、電話の音がした。誰かが受話器を取ったようだったが、呼ばれるよりも先に看守はそちらへ姿を消した。

「毒薬を持って来てほしいんだ」ちらりと奥へ通じる出入り口に目をやって、マティアスが言った。ティナは驚きはしなかった。おそらく何を言われても驚かなかったらう。そのような役割を今彼女は担っていたのだ。

「できるだけ早く、できれば明日、明日持って来てくれな  
いか」

マティアスと一緒にいた頃、君は頼まれたことをしてくれるのが早い、と何度となく褒められたのを思い出した。そしてその都度、彼は満足げな笑顔を見せたのだった。

じきに死ぬ者が自殺を図ろうとする、しかしその心理はこ

の場に及んでは重々理解できた。それを裏付けるかのよう  
に、マティアスは言った。

「ナチスの手で命を絶たれたくはないんだ」

ごく僅かな時間、言うべき言葉を捜していると、看守が戻  
ってきた。

「もう時間だ」

面会時間が何分なのか、ティナは知らなかった。あるいは  
知らされていても、聞き逃したのかもしれない。

エンマにはどう言えはいいのだろう、ひたすらそのことを  
ティナは考えた。ナチスの汚れた手で彼を地獄に送らせたく  
はない、あるいは、最後の一番苦しい長い時間を過ごさせたく  
はない、それとも、病気がひどいの、だから楽にさせてあ  
げたい……とも言おうか。

それでもエンマに会うと、ティナはこう言っていた。

「弁護士が控訴をするし、それに、もしかしたらもうじき  
戦争が終るかもしれない。そしたら赦免されて……」

「一番大事なことを言っただろう。気休めや慰めを聞  
かせてもらうために、あなたに大役を頼んだんじゃないの」  
毅然とした気の強さを思わせて、エンマはそう言ったの  
だった。

「これからシユトウツトガルトへ行つて、彼のために下着  
とか石鹸、あれやこれや買って来なきゃならない」そうティ  
ナが言うと、エンマは屈服した者のように頷いた。そしてい

きなり、

「マティアスはいつでも青酸カリを持っていた。いざとい  
う時のために。だけどそんなの当然、没収されているよね」

「そりゃ、もちろんそんなものは、当然没収されているで  
しょうね。でも、なんでそんなことを？」

「毒薬があったら、いいと思つて……」

事実上の妻の地位を奪い取った女だ、さすがによく夫の心  
を見通している、とティナは思った。短い沈黙のちにエン  
マがまた口を開いた。

「ねえ、どこからか毒薬が手に入りませんか？」

「何のために……」と、聞くまでもないセリフを吐く以外  
にこの場を繋ぐ方法が見当たらなかった。「きつとよくなる。  
神様が見放しはしない」

自分でも虚しく感じられる、空々しい物言いだ。マティ  
アスは無神論者だったよね、心の中で彼女は自分にもなく、  
相手にもなく、そう言いかけた。

ある医師に想いを寄せられている女友達をティナは思い出  
した。その女友達にティナは少なからぬ衣類を最近分け与え  
たことがあった。物不足の昨今友達は大いに喜び、きつと何  
かでお返しするからね、と言った。彼女に頼んで医師から毒  
薬を調達してみよう。それはそんなに簡単に運ぶ仕事だとは  
思えなかった。うまくいったとしても、少なくとも二、三日  
はかかるだろう。その間にマティアスが処刑されないという

保証ははたしてあるのか。あるいは調達できないということも考えられる。

どうでもいい、とティナは開き直った。他人事だ。いきなり無遠慮にも自分を訪れた見も知らぬ女——その女の愛人が、死刑になろうが自殺しようが、そんなことは大した問題ではない。そう自分に言い聞かせても、論理思考や理性では割り切ることのできない自己をティナは意識した。

どうだつていい。そんなふうに投げやりになっている時に限つて、事はうまく運んだ。

連絡を受けて、ティナは女友達を訪問した。

「彼はね」と友達は笑いながら言った。「彼もレジスタンスだと当局には思われている、少なくとも彼自身はそう勘ぐっている。もちろんこれは一種の被害妄想だけどね。あの人、すごく気が小さくて疑り深い。それで薬を出すまでの躊躇逡巡ぶりつたら、たいへんなものだったわ」

戦時下においてもその明るい性格が損なわれていない女友達は、さも面白げにその時の様子を語った。

ノッカーを鳴らすと、若い医師がおずおずと半開きに扉を開けた。官憲が逮捕しに来たと思つたそうだ。顔面蒼白だった。ドアの外で用件を話そうとする彼女を医師は玄関の間に引き入れた。無精髭をはやした彼を始めて見た、と彼女は言った。用件を手短に話すと男は一言も言わず、部屋の中をまるで動物園の熊のように行つたり来たりした。大柄な彼は実物

の熊を思わせた、と彼女は笑つた。やがて知性の塊である若き医学者は言葉を吐いた。

「それが運命、と言おうか、神の思し召しなのだから、神の意に逆らつてはいけない。運命には従順でなければならぬ」

友人は自分に思いを寄せている男をじつと見つめた。物も言わずに立つたままにいる彼女を力のないまなざしで見返して、首を横に振りながら相手は言つた。

「いやだ、できない。許されることはない」

官憲が調べたら、その死刑囚が誰から毒をもらつたかわかるだろう。そうすれば自分も逮捕される。それでなくともレジスタンスの疑いをかけられているのに……。相手はさらに言葉を続けた。

「それに当人だつて、まだ助かるかもしれない。そうなる  
と服毒はまったく早まつたことになる。あるいは処刑されるにしろ、最後の日にどんな悟りが開けるか、わかつたものではない。その瞬間を彼から奪い取る権利は何人にもありはしない」

なるほどもつともな論理だ。だけど私には、その人の奥さんに恩義があるの、と女友達は言つた。優柔不断な若い医師は悩みに悩んだ。どのくらい時間が経つたか、覚えてはいない。

「いいわ、他のお医者さんに当つてみる。さようなら」

そう言うとき男はやにわに彼女を引き止めた。そうしてコフエインをくれたという。

してやったり——立ち去ろうとする彼女を相手はもう一度引き止めて、そしてやり方まで教えてくれた。

「バターに混ぜて、パンに塗る。それが一番簡単なやり方だつて。もらった分はきっちり致死量。それ以上でもなければ、それ以下でもない。効果はたちどころに現われるような。それからもう一つ……」

もし官憲の取調べを受けるような結果になれば、その時は「他のお医者さん」から貰ったことにしてほしい。べつに実在するお医者さんでなくても、戦地へ行って今はいい人でもいい。いや、その方がいいだろう。そこまで用心深く彼は付け加えた。そしてコフエインの用途や効果について専門知識を披露してくれたが、それは迂闊にも忘れてしまった。

「いいよ」と、ティナは答えた。「そんな用心、私は思ってもいない」

かなりの量の雨が降っていた。列車は各駅停車で、暖房もない車室にはティナをおいて他に人もいない。どういう訳かわからないが、列車は時々停止した。屋根からは一定のリズムを保って雨が漏っていた。ティナはあれこれと思いを巡らし、巡る思いはかなりの速さで空回りした。自分と思考との追いかけつこだ。ハンドバッグには毒薬が入っている。こ

れをマティアスに渡してやる。間違ひなく彼は死ぬ。決して息を吹き返しはしない。かつての夫を亡くす女と今現在の愛人を失う女——どちらの方が痛手が大きいか。考えるまでもない。エンマではなく、この自分が彼に死をもたらす、自分と別れた男をその愛人から奪って殺害する——これは運命が選んだ妥当な選択だ。

ところで、どうして渡せばいい？ ティナは考えた。その時ふと思いついた。そうだ、こういうのはどうだろう。コフエインの量を減らして、おそらくは半分位にしてバターに入れる。それを食べた囚人は心臓衰弱を起こして病院へ運ばれる。ナチスに反感を持つ医師を買収して——もちろん金額はエンマが全額負担だ——死亡証明を書いてもらう。そうすれば——そうすればマティアスは助かる。だが、とティナは思った。本当に彼は病院へ送られるだろうか？ どうせ死ぬことが決まっている囚人を権力側がそんなに丁寧に扱ってくれるだろうか？ それに、いかにナチス嫌いの医師であっても、そんな危険なことを敢えてしてくれるだろうか？

列車が動き出した。今まで止まっていたことにティナは気づかずにいたのだ。冷たくて暗い、水っぽい景色の中をゆるゆると列車は走った。

弁護士だつて、とティナは思った。弁護士だつて信用できるものではない。反体制派の死刑囚を命がけで救おうとする弁護士がこの時勢にはたしているだろうか？ いや、誰一人

信用などできはしない。この私自身があるいは逮捕され、殺人の宣告を受けるかもしれないのだ。どうして選りよってこの私がこんな危険を犯さなければならぬのだろう。マティアスと自分が一体どんな関係にあるというのか。エンマが行けばいいのだ。さもなければ他の誰かが……。だがこの役割は自分でなければ許可がおりない。別れた妻とはなんとこの損な立場に立たされるものだろうか。

徹夜をして、身体が冷えきって、シユバルツェンベルクに着いた時にはもうそのあたりのベンチに座って動くことすらしたくはない、とティナは感じた。でも何かしなければならぬ。頭が回転しない。とりあえず弁護士に助かる可能性を聞いてみよう。それで埒が明かなくなったら、宣告の日までこの町に滞在しよう。刑務官の態度はまんざら敵意に満ちたものでもなかった。おそらくは——それはあくまでもその場の成り行き次第なのだ——パンを渡すことに成功するだろう。いや、そうに違いない、そうでなければ困る、とティナは一人で合点した。

弁護士を訪れると、朝食の最中だった。ハムトーストとコーヒーといった簡単なメニューだったが、さもうまそうにゆつくりしたペースで食べていた。ティナの策略を聞いて弁護士は、あたかも鼻先で笑うかのようにそれを一蹴した。

「死刑囚が、しかも反体制活動の被告人が瀕死の病気になるからといって、入院なんかさせられるわけがない。せいぜ

いが監房の中で野垂れ死にですよ」

依頼人の味方であるはずの男は一応同情するような表情を示したものの、「野垂れ死に」といった表現が切羽詰った立場のティナには胸に突き立てられたナイフのように感じられた。

「それで……」

「ああ、正式に決まりました。絞首刑です」

そう言つて弁護士はパンを頬張った。ティナは怒りよりもむしろ嘔吐を感じて、ハンカチで口を押さえながら、後ろ足を砂を掛けるように法律事務所を去った。ホテルへ帰り着くと、夜通し眠らなかつた疲れも手伝つて、トイレに駆け込んで思いつきり吐いてしまった。

「すごく顔色が悪いけど」エンマが訊ねた。「どんなだったの？」

「疲れ果てたわよ」

怒気を含んだ語調でティナは応じた。

「下着なんかは……どこ？」

「刑務所へ持つて行って渡してきた」

と、咄嗟に嘘をついた。またしても嘔吐を感じた。

「毒は……毒薬はどこにありますの？」

自分では何もできない愛人にせつつかれて、それでも優越感に浸ったり、その不幸を悦ぶようなゆとりはもはやなかつ

た。ただ苛々し、腹が立っただけだ。

「ここにあるよ」

そう言つて薬物の入った小瓶を見せた。

さらにエンマはさすがのように言葉を続けたが、ティナは大きなゼスチャーで煩わしさを表わし、背中を向けたかとおもつと外へ出て行つた。何もできない者は何もしゃべらないのがいい。この時そう感じた一言は、その後も彼女の呪わしい座右銘になつたという。

近くの旅館の一階に入つて隅の席に座り、粗末な朝食を注文した。食欲はまるでない。周りを見ると、対角線上の隅に中年の男が一人、こちらに背を向けて座っているだけだ。ティナは手早くバターにコフエインを混ぜて、それをパンに塗つた。そしてパンを包む。そんなに急がなくても大丈夫……自分自身にそんなふうには言い聞かせながらの作業だつた。

刑務所へ行くと、看守はもう何かに感づいているかのような目でティナを見た。そんなはずはない、誰からもそんなことは聞けないはずだ——ティナは自分に強くそう言い聞かせて、自身を励ました。

マティアスが連れられて出てきた。まるで予めセリフが決まっていたかのようにティナは最初の言葉を告げた。

「エンマがよろしくつて言つていた。彼女は元気よ、心配しなくてもいい」それからごく短い間を置いてティナは続け

た。「しばらくエンマを私の側に置いておくから」

「悪いね」マティアスはそうひとこと言つて、そのあと何も言わなかつた。

看守が監視する中、用件は早く済ませた方がいいとティナは思つて、早速切り出した。

「お腹が空いてるんじゃない？ バナナとパンを持ってきた。バターはもう塗つてあるから」

看守はそれを取りあげて、パンをひとつひとつ千切つて調べた。剃刀の刃か、あるいは何か書かれた紙片でも入っているのじゃないか、そんなふう疑つたのだろう。

切りただけ切るがいい、とティナは思った。ただ、官憲がパンの一切れを食べやしないか、それが一抹の不安となつて彼女を緊張させた。だがしかしそんな心配は無用だつた。毒が塗られているかも知れないと疑つたならば、自らの命を掛けて毒見をするはずはなからう。看守がパンを調べている間に、ティナはマティアスに目で合図をした。相手はすぐにそれを察した。

短い面会時間が過ぎた。随分長い時間に感じられた。ティナはようやくと肩の荷を降ろした。もう我慢が限界に達していた。

「ありがとう」とマティアスが言った。とつとくに別れたはずの夫婦は、心から互いの瞳を見詰め合つた。「俺の子供を一度でいいから抱いてやつてくれまいか。これはあまりにも

都合の良過ぎる要求だろうか」

「いいえ」短くティナは答えた。それ以外の言葉は見当たらなかった。そしてそのあとには形だけの挨拶が続いた。「私のことは何も心配ないから」

「俺も何も恐れてはいない」とマティアスは言った。連れて行かれる際に振り返り、「ありがとう」その一言だけを残した。これが最後の言葉だった。

マティアスは死んだ。ティナが死刑の宣告を聞いたのはその二日後だった。警官が二人やって来て、彼女を尋問した。予期していた彼女は平気だったそうだ。

「どうやってこの私が毒なんか渡せるのですか。たった二度しか会っていませんし、看守がすぐ側に立っていました。持って行ったものはみんな看守が検査しています」

パンだって千切って調べたのですよ、そう言いかけてティナは言葉を切ったという。毒を塗ったパンのことについては、ことさらこちらからは話題にしない方がいい、と判断したのだった。そしてこのように言葉を続けた。

「彼は——私の夫は常日頃から、いつも毒薬を携帯していたのですよ。万一の場合に備えて」

証拠になる物は何も発見できなかった。まずは一件落着とあったところだった。マティアスの死はエンマには伏せておこうかとも思った。隠しておいて、ここ一番という大事な時

に知らせてやる——だがそれはあまりにも不自然な営みだった。知りたがる相手の要求に応じて、ごく自然な成り行きでティナは彼女に本当のことを告げた。

それからティナはエンマをマティアスの伯母のところへ連れて行つた。自分の側に置いて絶えず世話をすると約束したものの、現実のやり方はそれとはいささか違っていた。だが週に一度はその伯母の住居を訪れた。それは愛する相手を失った女の気の毒な身の上を思いはかってのことなのか、それとも別れた夫の子供が気になったからなのか、あるいは……そうだ、自分が失った幸せ——その幸せを勝ち取った女の、その愛人を殺害してやったという加虐性の悦びが働いていたことは否めない。

だがこうした加虐的な悦楽は表面上の、空しい心理作用だった。

エンマに女の子が生まれた。もとよりティナとは全く血の繋がりのない子供だ。

「よく度々会いに来れるわね」とエンマは言った。「この私は敵のはずなのに」

確かに戸籍上の夫の子供を目の当たりにするという行為は快いものではなかった。約束通りこの赤子を抱いてやるなどということとは、露も考えられなかった。最初の内はマティアスが亡くなったということで興奮し、その精神的な混乱状態が続いていたが、その乳幼児を見る度にだんだんたまたまなく

なってきた。子供に憎しみはなかったのだが、その子供を設けた女体が、女の存在が、徐々に厭わしさを取り戻してきたのだった。

エンマがまた働き出すようになると、もうほうっておくようにした。時間が、時の流れがこの蟠りを消し去ってくれることを、いや、消し去ることは不可能であったとしても、時間が流れ流れて記憶の底溜りとなった過去の体験の澱を幾分なりとも軽いものにしてくれることをティナは願っていた。

\*

筆者は極力自己の感情を交えず、私見を廃してただ見知らぬ一外国女性の手記をここに虚構という名目で訳出してみた。彼女の勇気や責任感、そして不動の姿勢に賛嘆の気持ちを感じぬものでもない。けれどもこの手記の中に、あるいはその前後に、戦時中の彼女の生活や社会状況に対する告発、文明批評などは絶えて見ることができない。もとより権力による弾圧や迫害を恐れたということも考えられるが、それにしては一囚人を殺害したという事実自体が隠されるべきものではなからうか。

かの時勢下にあつて、ティナの敵は連合軍でもナチスでもなかった。彼女の敵意の対象はあくまでも一個人、一人の女にのみ向けられていたのだ。割愛しようかと思つた件を、や

はり筆者はここに掲げておくことにする。

もし今一人誰かに毒を盛ることが許されるのなら、とティナは記していた。それは別れた夫の愛人ではなく、その赤子に向けられていただろう……。愛人をマティアスの元へ送るのではなく、彼の子供をこそその元へ送ってやりたい。そしてあの女に、愛する男を失つた哀しみに加えて、自分の分身である赤ん坊を亡くす悲しみをも二重に味わつてもらえたら――

手記を読み終えて筆者は、東洋風な表現になるが「業」というもの、業の深さといったものを国を越え時を越えて、人間に断ち切りがたいものとして感じるのだった。

了

平成二十二年十月一日 原稿受理

大阪産業大学 教養部非常勤講師